

風が吹くたび春が来る

日居月諸

到着駅の出口を抜けると、横風が吹いてきて、スミに寄せていたら枯葉が舞っていった。三月の風は強く、渦を巻いているのははっきりとわかる吹き飛び様で、赤茶や黄金がソフトクリームのコーンを作るように円錐状に空へと昇っていく。

嵐は地面にあるものを根こそぎ空へと放り投げてしまふけれど、一方で、とてつもない引力をもって自分の懐に何もかも抱き寄せてみせる。ときおり抱き寄せたものでもって、自らの威容を誇らしげに表してくれる、造形の整った現象を作り上げてみせる。塵ボコリを巻き込んだ程度なのに綺麗に垂直にロクロを回すように走っていく姿もあれば、年輪を重ねた大木が雲へと届いた時の夢を思い描かせてくれるしなりをもった姿もある。そのうねりくねる姿から目を離さずにはいられない。だからといって、竜巻に巻き込まれたいわけではない。ずっと見ていたい。自然と自然が組み合わさっただけに、あたかも人が加わったようなその姿を。ひよっとしたら人間の営みは、この自然の力を真似るためだけに繰り返されていくのではないかと思えてくるその姿を。

……僕のもとに現れた突拍子もない印象は、地面へと散らばった枯葉達のまとまりのない姿とともに薄れていった。けれど、それらが円錐状に空へと昇っていった姿は頭に残っていた。妙なイメージは繰り返されない。けれど、円錐状は消えてくれない。まるでもう一度同じイメージを自分で作り上げた上で、なぜ頭にこびりついているのか考えてみる、

とうながしているかのよう。

出口の前の道を横切っていく人達を見て、自分もこれから会社に行くのだと思いつくと、しばらくぼうっとしていたことに気付いた。歩きだしてから頭の中の澱みのようなものは無くなってくれない。あんな変なヤツと会ったからかな、と電車で乗り合わせた中原のことを思い出した。

ホームで電車を待っていると、石段を叩く音が響いた。それが階段から来ているとわかって振り向いてみると、女の子が一段二段と段差を飛ばしながら駆け降りてきた。子どものような忙しなさだった。ショートカットに白のチュニック、青いクロップドパンツというコーディネートが幼さを映えさせていた。よくみると、僕と年代の子らしい。

階段を降りると彼女はこちらを向いて、電車、行っちゃいましたか、と息を切らして訊ねてきた。下り電車と上り電車の時刻を間違えていたとわかるのに時間はかからなかった。それよりも前に、彼女が高校の同級生であることがわかった。

中原は最近引越してきたから、ダイヤがまだ掴めていないのだと言った。なんで引越してきたのかと言えば、この辺りに住んでいる画家の弟子になったからなのだという。

「弟子って言っても自称してるだけで、ホントはセンセイがやってる事務所に勤めてるだけなんだけどね」

「どっかのコンクールに入選した絵が廊下に飾られてたっけ」
「あれがセンセイと知り合っかけだったんだよね。ていうか、あれが認められたおかげで今の職場にも勤められてる」

隣の芸大に進んだとは聞いていたけれど、中原に対する認識はそこで止まっていた。美術に関することよりも、教室で活発に振る舞っていた姿の方が覚えている。といっても高校の頃のことだと思いついたのは、

放課後の教室に二人で残って取りとめない話をしていると、窓の外がいつのまにか雪景色に変わっていて、それを見ながらこんな沢山の白に囲まれているとどこかあつたかく感じる、と言ってみせた、ヘンテコなエピソードだった。

そんな過去を掘り返せたのも、中原が相変わらず変な感覚を持っている女だと確かめられたからだ。途中の駅に電車が止まってドアが開くと、突風が吹き込んできて、中原のショートカットに隠れていた顔を露わにした。苦笑いを浮かべて手櫛で前髪を元通りにしている彼女を見つつ、「風が強い季節って大変だよな、いちいちセットしないとイケないし」「でも風が強い日に散歩すると気持ちいいよ？ 風の形がわかるもんね」風の形、という言葉が何を意味しているのかがわからなくて、正気かどうか顔を覗いたところ、中原は車窓いっぱい広がる青空を見ていた。上の空という様子ではない。

窓の外に吹いているだろう風の姿を見ているのかと冗談まじりに訊いてみたところ、見えないからこそいいんだって、見えたらつまんないもん、と窓から目を離さなかった。

「大体、形がわかったからどうだっていうんだよ」

「目には見えないけれど、形がわかるってすごいじゃん。人間って目だけで物事を知るんじゃないんだなあ、って思えるし」

「それって触覚のことだろ？」

「違うよ、触覚と視覚が組み合わさってるんだって。触れると形が頭に浮かんでくるんだよね。目だけって言ったのは目が一人で考えてるんじゃない、って意味でさ、視覚が触覚を助けてあげる時もあるし、その逆もあるってわけ」

それ以上踏みこんでも何の糧にもならない会話だったので、僕はおざなりな相槌を続けることに決めた。けれど、中原の話は一層奇抜さを増

していく。まるで僕が意味を掴みとれていないと思ったかのように。事実、何一つ呑み込めていなかった。ただ、だからといってすべて理解しようという気は起こさなかった。そのあたりの食い違いを、彼女は認識していなかったのだ。最早、自分の感覚を確認するために喋っているようなものだった。

そういう会話をしているとげんなりしてくるけれど、中原はかえって楽しげにしていた。他人と噛み合わない不安になつてくるという感覚がないようだ。そして僕自身、楽しげな様子が救いになつていたのか、付き合いきれないという気分はしなかった。高校の頃から、そんな風に付き合える女子だった。

放課後に二人で教室に残っていた時だって、吹雪で帰りそびれたからという口実はあつたものの、嫌々付き合つていたというわけではない。中原は美術部の送別会に使う花飾りを、三年生として見送られる側にも関わらず作つていた。美術部はただでさえ人が少ないからと頼みこまれた末に、僕も手伝わざるを得なくなった。退屈しのぎに二人で他愛もない話をしている間、中原は喋っていないと気が済まないともいうように、話題をあちこちに飛ばした。大抵理解できないことばかりだったから会話の内容まではもう思い出せないけれど、思春期らしく斜に構えていた僕にしては、珍しく他人の話をもとに受けとめようとしていた。向こうも真面目に話してくれているから、それに応えなければいけないと思っていたのだろう。

「そういうや、桜井君は絵とか好きだった？ 今度センセイが個展やるんだ」

「嫌いつてわけでもないけど」

「センセイの絵は凄いいよ、普通の展示だったら立ち止まってじっくり鑑賞するのが普通だけど、センセイの場合は歩き回りたくなくなっちゃうから」

また掴み所のない話を始める雰囲気が流れた。

「中原の絵も展示されたりするの？」

「ううん。個展だつて言ったじゃん。個人展覧会。とにかく来てよ、桜井君が普段使つてない神経のあちこちがマッサージされるよ？」

結局、中原はよくわからないことを延々と話し続けた。それもセンチとやらの作品を具体的に紹介するというより、自分の鑑賞体験を抑制なしに語り続けた。ヨシミで宣伝するという様子でもなかったのでまだ耳は傾けられていた。個人的な感覚を話しているだけならば、理解しようが無理に努める必要はないのだ。

電車が目的駅に着いたらしく、先に席を立ったかと思うと、じゃあ、絶対に来てよね、と手を振ってきた。電車が走り出すと、僕はセンチとやらの名前さえ聞いていないことに気付いた。

まあ、きつとまた会えるのだろう、と思つていただけで、翌日の出発駅のホームには彼女の姿は見えなかった。翌々日も見えなかった。電話番号もメールアドレスも交換していなかったし、何を根拠にあんな催促したのだろうと呆れてしまった。

嵐のイメージと、中原との再会は、数日のあいだ頭の中に居座り続けた。二つともなかなか具体的な姿をもつて目の前に戻つてこなかったから、その空白を埋めるために僕の思考力の粗方が注ぎ込まれているようだった。まるで両方とも、僕にとって重要度の高い事柄のようだ。最初はそのこままでの物ではなかっただろうに。

嫌気がさすわけでもなかったけれど、良い気分にもなれはしない。あやふやな感覚が頭を占めていた。どう話していいかわからないから、同僚にも相談できなかった。

それに加えて、仕事が終わつた帰りに上司から飲みを誘われたところ、

君もカノジョがいなくなって寂しい思いをしているだろう、と言われたから、誰かに話そうという気持ちはずます薄れていった。事情を知らない他人は、男女が久しぶりに出会つたというシチュエーションだけを切り取つて僕と中原の関係を誤解するだろう。恋人がいなくなった淋しさを埋める代替物としてかつての同級生を見ている、という風に。上司に押しつけがましい付度をされるまでは恋なんて気にも留めていなかったから、憶測であることは間違いない。誤解を消すにあたつて使われる労力を考えるだけでも、億劫になるくらいだった。

冬に別れたばかりの元恋人にも、格別な未練を残しているわけではない。冬に入る前にお互いが薄々、一人になったほうがいいのではないかと感じ合っていた。まだ二人でいられる可能性が残されているかどうか確認するように数カ月を過ごしたものの、結果としてその時間は軟着陸するために費やされたと思いだせる。

別れが近づきだした頃、悠は僕の顔をよく覗きこんできた。その理由は訊いても教えてくれなかったから、僕も彼女の様子を観察するように見ていることが多くなつた。別れる間際になつてそんなことを始めたのだから、お互い相手の実相を明らかにしようと努めていなかったのだろう。実際、それで何不自由なく暮らせていた。

かといつて諍いがなかったわけではない、とアパートに帰つてテレビをつけた時に頭が補足しだした。テレビの修理をめぐつて口論になつたのだ。まだ仲良く付き合っていた頃の話だ。結局、家電量販店に勤める友人の配慮で安く修理してもらつたのだけど、悠はなぜか新しいものに買い替えるようせがんできた。あの手この手で持ち出された言い分は思ひ出せない。店頭にて安い新製品を薦められる頃には、丁寧に断るようになっていた。むしろ、すんなりと修理を引きうけてくれた友人の態度の方がよく思ひ出せる。店の利益を優先するのが普通だろうに、まるで

僕達の経緯を推しはかったかのように速やかに処理してくれた。世話をかけてしまったとの疾しさを覚える隙も与えてくれなかったほどに、極めて事務的に事を済ませてくれた。

あいつも高校の頃からそういうヤツだったな、と振り返った時、ようやくここ数日の宙ぶらりんな感覚を解消してくれる相談相手が見つかった。ジョーなら僕と中原の関係も知っているし、相手を茶化さない真面目な性格だから、しつかりと話を通せるだろう。

電話すると休みが同じ日に入っているとわかり、一緒にメシでも食べに行こうと決まった後、ちょっとした悩みを聞いてもらいたくてさ、と打ち明けると、かまわないよ、と応えてくれた。電話口から聞こえてくる声からは少しの億劫さも感じられず、段取りを決めるために必要な事柄だけを話す口振りがうかがえた。そうなればこちらも余計なことは喋らなくていいので、氣遣いをする労力が省ける。久しぶりに会う相手にお悩み相談を求めるといふ身勝手さも含め、都合が良いようにも思えたけれど、僕達にとっては簡潔な付き合い方が一番楽なのだから仕方がない、と思いつつ電話を切った。

鉄板焼きの店に行くと、ジョーは席に座って待っていてくれた。自分の注文は済ませていて、鉄板の上で焼かれているお好み焼きはひっくり返される頃合いらしい。僕も注文を済ませると、かいつまんだ話から始めた。僕が鉄板の上で焼きそばを炒めながらまとまりのない話している間、ジョーはお好み焼きを食べつつも上手く相槌を挟んでくれた。

「中原と会いたいのか？」

「むしろ、向こうが会いたがってるみたいだし……いや、僕も会いたいだらうな」

「会えたから何かが解決するって話なのか？ お前の頭の中にある色々な事がちゃんと中原と結びついてるなら、その通りなんだろうが」

「元々はそうじゃなかったはずなんだけどね。あいつのせいで全部引っぱり出された感じがあつてさ」

「結びついてるって誤解を解くにも中原が必要ということか」

「それに、向こうはそんなつもりはなかったんだろうけど、約束した気分になってさ。個展に行かなきゃならないのかな、っていう具合に」なるほど、とジョーは水を飲んで一呼吸置いた。

「それなら理紗が力になれるんじゃないか」そう言つて、自分の恋人の名前を出した。「あいつと中原は仲が良かったからな。大学に入ってからどうかは知らないが、どうにかすれば中原と連絡くらいは取れるだろう」

そのことは知っていたので、そういえば、と相槌を打った。同時に、何の算段もなしに、友人に話を聞いてもらえればそれでいいとしか思っていない自分の無思慮ぶりに呆れかえった。

「でも、理紗に助けてもらおうのはなんだかシヤクだな。あいつこそ僕らの関係を誤解しそうだ」

実際、中原と二人で花飾りを作っていた時、教室のドアが開いて理紗が入ってきたかと思うと、そういう関係だったのか、と茶化してきた。事情が分かっているくせにそういう態度を取るからタチが悪い。ジョーが教室に入って来て帰ろうと促してきても、中原と手を組んであれこれと理由をつけては、花飾りを手伝うよう仕向けてみせた。そんな面倒な女に相談すれば、話がこじれる可能性さえある。

「それ以外に手立てはないぞ。駅のホームでまた出くわすのをずっと待ってるのか？」

ためらいというものをわかってくれればいいのだけど、と友人の愚直さが恨めしくなった。とはいえ、嫌味なんてなさそうな、顔色を変えずにお好み焼きを食べ直す様子を見ると、説得する労力を使う方が無駄だと悟った。

理紗に電話したところ、留守電につながった。少しくらい話をするなら大丈夫だろうということで、彼女が勤めるヘアサロンにそのまま向かった。

店内に入ると、真っ先に理紗が迎えてくれた。留守電に入れたメッセージを聴いていたらしい。

「少しは金落としていきなさいよ、情報料代わりと思って」

席をすでに予約しているほどの抜け目のなきで、ジョーを見やったりと、いつものことだから諦める、とばかりに首を振られた。

「薫なら今でも連絡を取り合ってるわ、引越し先はまだ決まらないみたい。実家を拠点にしてるけど、勤め先からは遠いから、あちこちの友達の家にも泊まってるんだって。私の家にも来たわ。てことは、アンタの最寄り駅の近くのどっかに泊まってたんじゃない？」

あの子高校の頃から全然変わらないよね、ショートカットだけじゃなくて他の髪型も試したら、って言ったんだけど、これが一番似合ってるの一点張り。ファッションもガキっぽいし、デザインの勉強もしただろうにどうしてああなんだか。そうそう、相変わらず変なこと言うけど、一層面白くなってるから、変わってはいいるのかな」

髪を切られている間、こちらが喋る暇も与えてくれない話に付き合わされた。コミュニケーションを取るつもりがないのに語りかけてくる人間というのは、鬱陶しいことこの上ない。よくこんなに喋りながら致命的なミスをしたくないものだ、ミスさえしてくれば不満のぶつけようはあるのだけど、とハサミを捌く手つきに注目して気を紛らわせていたのだけど、

「そういえばアンタの元カノ、うちに来たわ。パーマかけていった。相変わらず綺麗ね、あの人」

ふうん、と相槌を打ったけど、内心では面倒なことになってきたな、

と気が重くなっていた。

「勿体ないことしたわね、あんな綺麗な人なかないのに。その代わりが薫かあ、ストライクゾーン広いわね、アンタも」

だからそういうわけじゃないって、と抗おうとしたけれど、前髪を切るから目をつむっていると言われたので、怒りが上手く表せなくなった。

「でもさあ、パーマかけるってことはやっぱり意中の人がいるってことよね」

何がやっぱりかはわからないけれど、一人になったのだから新しい恋くらいするだろう。それで全く構わない。僕との恋愛がダメだったのだから、他の相手を見つけて自分の適性を試してみる。それがあべき姿なのだろうから、言葉を差し挟む余地なんてない。

もともと、悠が一人になるとどんな顔をしているのだろうと、想像したことはある。その様子を傍から見れば、僕の知らない面がいくらかでも見られるだろう。誰かというのなら、僕の隣にいた時とそう態度は変わらないはずなのだ。現に、僕自身一人でいると、自分の体を持って余しているような感覚に陥る。他人と顔を合わせている時は、シチュエーションに見合った人格を作り出そうと集中すれば済む。その寸法で行くなら、一人でいる時は自分らしい姿であろうと集中しなければいけない。けれど、自分がわからなくなる時が来る。ここ最近の僕のように。悠なら、そういう場面に出くわした場合どう対処してみせるのだろうか？ その時こそ、彼女の実像めいたものが見えてくる気がするのだ。

「はい、おしまい。軽く流すわ、席から立ってちょうだい」

はからずも悠を思い出していたことで、理紗の話聞き流せていたらしい。どこまでもシヤクな思いをさせてくれるな、と毛を払いながら思った。

個展には理紗も行こうと思っていたから、あした中原と会うついでに

一緒に行くことになった。ジョーは休みが合わないと言った。

個展の会場は街中の美術館に設けられていた。入口に貼られたポスターには見覚えがあつて、センセイとやらの名前にも耳馴染みがある。理紗によると、これから世界にも売り出していく気鋭なのだそうだ。

中原はまだ来ていないようで、先に絵を見ておくかと提案されたけれど素養がないし、せっかくだから専門家に解説されながら見た方が良さと思つて待つことにした。だったら飲み物でも買つてくる、と言つて理紗はどこかへ行つてしまい、手持無沙汰になったから、空でも見ているほかない。青空を見ながら、ここ最近はずっと天気が良かったことに気付いた。同時に、風も強かつた。これだけあの時と同じ条件が揃い続けているというのに、どうして嵐のイメージはやってこないのだろう、と首をひねつた。

風が吹きつけてきた。昼になる前なのでうすら寒く感じられ、顔を背けた。風の形も何も、こんな中でよく散歩しようと思うものだ、と同級生の言葉を振り返っていると、地面を強く鳴らし続ける足音が聞こえてきた。青いデニムのサロペットスカートの上に、チェックのカーディガンを羽織つた女の子が駆けてくる。ショートカットが跳ねていた。着飾つてきた理紗を見た後では、あどけなさしか感じとれない。

ごめんね、遅れちゃつた、と中原は息も整えずに言つた。今来たところだと教えると、ホント？ と息を落ち着かせて、

「桜井君なら来ると思つてたよ」と笑つて言つた。「そういえば、理紗もまだ？ なら急いで来る必要なかったかな」

飲み物を買に行つたと教えると、中原は苦笑しつつ頭を掻いた。

「ていうか、どこで個展やつてるかも教えなかったのにどうして来ると思つたんだよ？」

「えつ、言わなかつたっけ？」

途端に目を丸くしたから、ひよつとしたら聞き逃していたのかと思つた。けれど、理解可能かどうかの判別が出来るくらいには耳を傾けていたつもりだった。

「まあ、教えなくても桜井君はここに来る運命だったんだよ、そういうことにしておこう」

そう言つてこだわらないからには、やはり教えてくれていなかったのだろう。呆れていると理紗が戻つてきて、両手に缶ジュースを持ちながら、三つ買つてくれば良かったか、とそれほど反省もしていなそうな口調で言つた。

「ここはカズミを振り回したお詫びに薫が諦めるべきでしょ」

「今日のホストになんてこと言うのさ。そもそも買い直してくればいいじゃん」

「じゃあアンタが買つてきなさい。お金も自分で使つてね。大体ホストがワガママ言うつておかしいつて」

「走つてきたばかりの女の子に酷いこと言うなあ」

「遅れてきたアンタが悪いんでしょうが」

僕が諦めれば済む話だった。じゃあしようがないわね、と理紗に言われると、二人ともそれを当て込んで茶番を演じていたように思えてしまう。顔を突き合わせて花飾りを作っているところを茶化された時も、中原は上手くかわして、理紗と漫才めいた掛け合いをやつていた。延々と続けられる馬鹿話に向かつて、いつまで経つても花飾りが作り終わらないだろ、と戒めれば、付き合わされていたはずの僕が仕切り役になつてしまつている。

後ろで何かを喋っている二人に先んじて入場券を受付に渡していると、あたかも僕が率先して美術館にやつて来たかのようにだった。この二人、

特に中原とはこんな風に付き合っていたと、ぼんやりと思い出せた。時折僕の足を止めては、クラスメイトが今どうしているのかと訊いてくる。辺り、彼女達も懐かしさを感じているようだ。

個展は大広間を全て貸し切って行われており、センセイの腕の程をうかがわせた。

「うわっ、なにこれ、写真？」

理紗は入つてすぐのところに展示されている絵の前に立ち止まった。線香を上げるような片手を上げた恰好で、女性がガイコツを持っている。あまりに輪郭がくつきりとしすぎていて、臨在感ともいうべき、そこに人がいる感覚があった。けれど、紛れもなく絵だった。髪の毛の一本一本や肌理まで書きこまれているので、写真と見まがってもおかしくない。ただ、筆の跡のようなものは見えるから、間違いなく絵画だ。

「写実主義ってやつか」

生半可な知識で口を滑らせてしまうと、中原に目をつけられた。スーパーリアリズムという、写真のような絵を描く技法だと説明された。写実主義と呼ばれるものはどこまで追及しても絵特有のトーンのようなものを感じるけれど、スーパーリアリズムは絵らしささえなくしていくのだという。

「もつとも、センセイの絵はのっぺりした写真ともまた違ったものがあるけどね」

誇らしげな中原に案内されて展示されている絵を渡っていく間、森、子ども、路上、海などのモチーフが、いずれも間近に実物があるかのように眺められた。

「でもさ、それなら写真でいいんじゃないの？」

「ここに飾ってるもの見てて、写真と何か違うって感じはない？」

「まあ確かにあるけどさ……」

「上手く言えないよね。センセイはそういう上手く言えないことを描こうとしてるんだ。ここにあるモノを描くんじゃなくて、モノがここにあるように仕向ける何かを描こうとしてる」

電車に乗っている時、似たようなことを言われた覚えがある。実際に絵に向かつてみると、あながち理解できない話でもない。

かといって、センセイが実際にあるものだけを写しとり続けているわけではないらしい。展示の中ほどに進んでいくと、骨で出来ているビルが現れた。人間の骨だと人目でわかるものが、何重にも積み上げられている。絵であるという感じがまるでしない。モノがそこにあることを作り出している何かさえ掴めればこんなものも描けるのだとわかって、理紗もようやく納得した様子だった。一方で、中原は浮かない表情をしていた。再会して以来、初めて見た表情かもしれない。

「センセイはこの辺の絵は嫌いみたいだけど。私も嫌い。たとえば木だつたら木をそこにあるように仕向ける特有のメカニズムがあつて、人だつたら人特有のメカニズムがある、って感じなんだって。一つのモノに備わっているメカニズムがわかったからって、全部そう描けるわけじゃない。でもセンセイは、描けると誤解してた時期があるって言った」

それでも展示したのは、美術館のスタッフやスポンサーから求められたからなのだという。こういう作品がないと、理紗のように誤解したまま帰ってしまう人達がいるだろうと予測した上での配慮なのかもしれない。

センセイが嫌っているらしい作品群が終わってからは、また最初に見たような実物を写しとった絵が並んでいた。それ以上解説する必要がないとわかったからか、中原は僕達の隣にはいないで後ろをゆっくりと歩くようになった。弟子を自称するくらいだから何度も見ているだろうに、と思っただけれど、それくらいセンセイの作品が好きなのかもしれない。

表情も、最早見慣れてしまった、楽しげなものに戻っている。

一通り見終わると、理紗の提案でもう一度最初から見ることになった。理紗もセンセイの絵を気に入ったらしく、弟子ならアトリエに捨ててある絵とか持ってこれないの？ と中原に無理な要求をしていた。

再びぐるりとしている間は、最早じっくり見なくても一目で何が描かれているかわかるから、安心して次の絵に移る事が出来た。だからといって、一つ一つの価値が薄いというわけではない。センセイの絵は現実の隣に、猫や草原が佇んでいる。椅子や壁を見つめることはないように、猫や草原を見つめることはない。椅子や壁の横を何事もなく歩くように、猫が止まっている姿を横目で流していくし、草原が広がる姿をぼんやりと見渡す。そういう風に、意識を高めなくても現実はそのにある、という安心感があるから、じっくりと見る必要はないのだ。

普通の絵は鑑賞する、と言いたくなるが、センセイの絵は目で見る、といった方がふさわしい。動き回りたくなる、という中原の宣伝文句が浮かんで、うっすらと理解出来るような気がしてきた。無数の絵が作り出している現実に近い空間に、僕は暮らしているのだ。

芸術の営みは自然を真似るために繰り返し返されてきた。芸術を通して自然を写しとることで、人間は自然の見方を獲得する。自然というのは、人間の視覚も含まれる。自然を模写するのならば全てを模写しなければならぬ。もちろん、自然を見つめている自分の眼差しをも。

……また、嵐のイメージに似た考えが頭をよぎった。ただ、待ちかねていたものがやってきた、という感じではない。むしろ、より大きな不可解さを僕の頭に残していった。今のは一体、と妙な言葉をもたらしたものを探っていくと、わずかに開かれたドアから顔をのぞかせる女性はこちらを見つめていた。流し目を崩さず、何かを言いたげに少し口を開

いている。見つめ返しても、何も言ってくれない。

絵だということはわかっている。ただ、描かれた女性は何かを言おうとしているのだ。そういう風に描いているのではなく、口からの呼吸で空気を震わせている姿がそこにあるのだ。もしかしたら、芸術にまつわる言葉はこの人から聞こえてきた声なのだろうか？ それとも、センセイがこの絵の奥から語りかけてきたとでもいうのか？

いくら問いかけても、箴言風のフレーズの正体はつかめなかった。これまで芸術にほとんど興味を示してこなかった僕に、こんな考えがあらじめ染みついていたわけがない。他人からもたらされたものだと判別はつく。それこそ、中原が喋っているようなわけのわからない話に近い。

「どうしたの、桜井君？」

振り返ると、中原が見上げてきていた。さっきまで歩きまわっていたはずの彼女が、立ち止まっている。それくらい、僕の立ちすくむ姿は目についたらしい。駅の出口を抜けた時もそうだった。人波が歩いていく姿をみて初めて自分が立ちすくんでいるとわかった。そして、これら二つの奇妙な瞬間が訪れる前には、必ず中原と会っている。

「この絵さ、センセイのアトリエの扉に飾られてたんだよね。お客さんが来るたびビックリするのが面白いから、つてことで。そういう人なんだ、センセイって」

指さしながら笑う中原の声を聞いていると、電車の中や美術館で聞いた話が原因となって、突拍子もないイメージが沸き起こっているのかと思った。無意識に、センセイの芸術観に染められているのかもしれないけれど、展示物には嵐の絵はなかった。僕の頭の中で巻き起こったものは、もつと具体的なものだ。話を聞いたくらいでは到底イメージも出来ないような。腑に落ちない思いを残し、僕は中原に曖昧な返事をした。

美術館を出ると、もう昼時だったのでファミレスに向かった。昼食を終えるなどどこかに行こうか、という話になったのだけど、理紗に用事が出来てそのまま帰ることになった。

「桜井君にはこれからもっと色々な絵を見てほしいな」

駅に向かうまでの道すがら、中原はそう言ってきた。

「ああ、中原の絵も見てみたいな」

「それはどうでもいいんだよ」

そう言って様々な芸術家の名前を出してきた。自分の作品を見られることが照れくさいという様子ではなくて、他に薦めたいものがあるからそちらを優先しているようだった。

「でも中原の絵を見てみたいのは事実だよ。センセイみたいな絵を描いてるならなおさら」

もちろん、嵐のイメージの謎を解くアテを見込んでいるところもあった。

「センセイのものはスタイルが違うけどね。ということ、桜井君のご期待には答えられない」中原はいたずらっぽく笑った。「まあ、新しい家が決まったら見せてあげるよ。キャンバスは全部実家に置きっぱなしだからさ」

そう約束してくれたかと思うと、何かを思いついたように中原はあらぬ方を見ていた。少し視線の力を強くしてみると振り向いてくれて、

「それより、今描いている絵が完成した時に見てもらった方が早いかな」

「風の形でも描いてるの？」

「前に描いてたけどね。まだあんまり上手く描けないんだ。ていうか、まだ風の形をわかりきってない」

冗談のつもりだったのだけど、考えてみれば中原は本気で言っている

のだった。果たして絵として認められるのだろうか、と実物も見えない内に疑わしくなったけれど、抽象画というジャンルもあるのを思い出して、芸術には何でも受け入れてくれる器の広さがあるのだろうか、と知った風になった。もともと、中原は具象画として描いている可能性もあるけれど。

「センセイみたいな絵は描かないのか？ たとえば……」辺りを見回すと、咲き始めた桜が見えたので、指をさした。「あれとかさ」

「静物は描かないことにしてるんだ。静物はセンセイが書いてくれる、だから、私は動くものを描くことにしてる。こんな風にお昼になったら太陽があつたかく感じられて、空を見てると体じゅうが青くなつていて、青を見てるだけでもあつたかくなるような感じを描きたいんだよ」

文脈がまるで噛み合っていないかった。その割に、中原は青空に向かつて目を遠くさせながら、時々うなずいて、自分が述べた言葉の先にあるものを見つけているようだった。どういう考え方をすれば彼女の思考に追いつけるか、なんとなくわかり始めた気がしていたけれど、まだまだ背中も見えないらしい。仮に中原と嵐のイメージが結びついていたら、僕は嵐のイメージの意味するところをこの先も掴みとれない気がしてきた。それとも、中原を追いかければ、いつか理解できる日が来るのだろうか？

「桜が満開になったら、今度はジョーにも会えるといいな。高校の時に行けなかった所、どんどん遊びに行こうよ」

「休みが合えばいいんだけど」

「大丈夫じゃない？ 今日だってちゃんと三人で集まれたんだしさ」

今日会えたから、これからだって会える、そんな短絡な論理なのだろう。業種が違うから、という論理の補足を用意していたのだけど、これでは用を為さない。おさなりに同意するしかなかった。

駅に着くと、それぞれ乗っていく電車が違うようだった。今日は実家に戻るのだという。

「じゃあ、またね」

切符を買って改札をともに抜け、電車がやってくると、中原は手を振った。今度はメールアドレスも電話番号も交換しているから、ちゃんと保証のある挨拶だ。ただそんな形式に沿ったつながりとは別に、窓越しにこちらへと手を振り続けている笑顔を見ると、彼女は身近に存在し続けるだろうし、何かしらのきっかけで遠くに行こうと、必ず戻ってくるような気がした。人懐っこさ、という言葉が浮かんだ。

電車が走り出して、風が吹いてくる。太陽が一番高い所の上っているから、涼しく感じられた。スピードが上がるにつれて窓々が一つのまともまりへと連なっていく。

風が吹くたびに暖かくなる。季節の変わり目には、青空が訪れると共に風が吹き続ける。初めの頃はまだまだとげとげしく、うすら寒さを残していく。雛の卵を抱えこむように竦みこんでいるとおのずと体が熱を帯びてきて、そのうち寒風が涼しげに感じられる。そして、体の内側に残していたうすら寒さがいよいよ和らいでくると、空気が暖かく感じられる。あまりの暖かさに気が緩んでしまって、錯覚のように背中に震えが走る。

……電車が遠ざかり風が止む間際、また不可思議なイメージが訪れた。これで三つめだ。どうやら、一つ一つじっくりと解決させてくれる暇も与えてくれないらしい。それともやっぱり全てがつながり合っていて、一つの謎を解き明かせばあらゆる疑問はなくなっていくのだろうか？ 手探りで物事を進めていかなければならないようだとなると、暗然としてしまった。ただ、奇妙な考えを繰り返している内に、段々と自分は元々こういう思考をしていたものの、あまりに瞬間的だから気付かなか

ったのではないかと客観的に眺められるようになってきた。けれど、そのことで生まれる余裕が、救いになるというわけでもなかった。

電車がやってきて、風の涼しさを感じると、しばらくぼんやりとしていたことに気付いた。連結された車体が滑るように走ってきて、長細いガラスが区切られていつ一つ一つの窓へと変わっていく。スピードがゆるめられて、乗るべきドアが定まってくると、車内から女性がこちらを見つめていた。赤いドルマンニットを着ているから、周囲の乗客に比べて目立っている。ドアが開くとポプカットが揺れて後ろへなびいたけれど、僕からは目を離さなかった。

「久しぶり」

悠はホームに降りてくると、声をかけてきた。仮にも元恋人と出会ったというのに、その様子にはまるで迷いがなかったので、僕は半端な返事しかできなかった。悠は顔を少しも変えず眼差しを真つ直ぐ向けて、それから少し後ろを向いた。毛先が曲線を描いた。

「いいの？ 乗らなくて」

「少し、話さない？」

悠は目を見開いて、ようやく顔色を変えた。視線もズラして、考え込む様子を見せた。そうしている間にホームには降車したばかりの客しかいなくなり、乗客も粗方動きを止めて発車するのを待っていた。ようやく、僕が乗るべきだった電車が行ってしまふのだな、とわかった。悠と二人きりでいるような感覚しかなかった。周りに人波があるのだとわかってからも、その感覚は残っていた。

「少しだけ、ね」こちらを探るように一瞥しながら、悠は承諾してくれた。それから駅の階段を向いたかと思うと、「それじゃ、行こう」

先立って歩く悠は人波に紛れても目立っていた。コーディネートや、彼女と面識があるというのが助けになっているのだろうが、それを除い

でも際立った存在感を放っていただろう。理紗の言う通り、綺麗な女性だった。

「よかったの？ 電車賃、無駄になっちゃうけど」

振り向いて確かめてくる。別に大した額ではない。時間も問題ではなかった。僕は悠と話したかった。別れたことによる未練というより、単純に、目の前の綺麗な女と話したかった。この女がどういう人間なのか、知りたかった。この機会を逃したら、次はいつ会えるかもわからなかったから、しっかりと話しておきたかった。

「どこに行くつもりだったの？」

「帰るつもりだったよ、だから、時間はあるんだ。そっちも、本当に良かったの？」

「大した用事じゃないから。それにしても、変わってないね、カズミ君。」

三カ月くらいしか経ってないから、当然と言えば当然だけど……」

「別れた相手には、どこか変わって欲しい、って思う？」

「まあね」

切れ切れない会話をしながら、悠がよく承諾してくれたものと今更のように思った。僕からの誘いも、何の考えもなしに言葉が出ていたようなものだ。そして、考えたところでもっともらしい動機があるわけでもなかった。

ただ、悠は声をかけないでいることだって出来た、と考えてみると、彼女にも僕と話したいという気持ちがあったのかもしれない。独りよがりの推測ながら、少し嬉しくなった。ヨリを戻せるかもしれない、という希望ではなく、単純に目の前の人が僕を求めてくれていてということが好きだった。

付き合い始める前にも、そんな感覚があった。急に電話をよこしてきたかと思うと、服を買うのに付き合っただけ、と言ってきた。結局、

悠の友達と三人で出掛けたのだけど、ファッションの事なら女二人で見て回った方が良いものを、それでも僕を誘ってくれたのは、特別な感情を抱いてもらっているのかな、と思ったものだ。

「髪型変えたんだね、友達美容師がうちの店に来た、って言った。」

綺麗な人だって言ってたよ」

「もしかして、俵さん？ あのよく喋る……恥ずかしいな、自分が一人でいるところを見られるって」

コーヒーショップで差し向かいになってからも、切れ切れない会話は続いた。ただ、気まずさはない。別れを決意した時だって、お互いが納得していたのだ。どちらかというところ、恋愛を度外視した場合、僕はどう付き合えばいいのか、そんな方法を模索している風でもあった。

「一人でいる方が、気楽？」

なにそれ、と言って悠は笑った。皮肉と受け取られたらしい。そんなつもりはなく、単に一人で自分と向き合っている苦にならないのかどうか、気になっただけだった。

「でも実際、そうかもね。誤解されそうだけど、カズミ君と別れてから、自分が無理してたんだってわかった。二人でいればきつとんだって大丈夫、って思ってたから、ずっとカズミ君の隣にいられるように頑張ってた。でも、そのくせ自分のことは蔑ろにしてたんだから……」

そう言うと、悠は耳元の髪をかきあげてうつぶいた。付き合っていた頃はもっと長い髪を持ち上げていた。その仕草は、心の重荷もちゃんと持ち上げられるように、と念じているようでもあった。

今はそれほど深く考え込むこともなく、すぐに手を離して、頭を振りながら髪型を整えていた。

「一人の時間が多くなったからかもしれないけれど、もうちょっと自分を大事にした方が私らしい、って思えるようにはなってるよ。こんな風

に言う、別れたおかげ、って思われるかもしれないけど」

別れる間際にも、そんな話をした。僕は自分のことで手一杯な人間であるはずなのに、恋人同士となることでお互いのことに首を突っ込むようになってしまった。正確には、相手を自分の管理下に置くことばかりしか考えていなかった。

テレビの一件を思い出していると、なおさらそんな風に付き合っていたと確認できた。僕はこれから二人で使うお金を取っておきたかったから、修理にこだわった。二人でいられる時間が確保されると思っていたのだ。悠はそれに対して新しくテレビを買う意義を説いていたけれど、本当はお金や時間などなくても二人の絆を強める方法はあると言いたかったのではないかと、今となっては振り返られる。

僕の結果はまだわからないところが多いけれど、悠に関しては本当に、別れて良かったのだと思う。

「つまり、まだ新しい人は見つけれられてないんだ。なんか、ホッとした」
「どういふこと？」

「僕さんがさ、パーマかけるからには新しい人が見つかったんでしょ、って言ってた」

「どういう理屈？」

悠は笑った。ホッとしたと言ったけれど、嫉妬というよりも、彼女がゆっくりとした自分の時間を作れない内に、また過ちを犯してしまう可能性が生まれなくて良かったと思ったのだ。

「じゃあ、そっちはどう？ まだ一人でいるつもり？」

「どうかな……よくわからない。一人でいるのか、二人でいるのか」そう言っている間、頭の中では高校の頃からの友人達が浮かんでいた。「もしくは、大勢でいるのか」

「冗談じゃ、ないんだよね？」

悠は目をのぞきこんでいた。そのうち見つめる力が強くなった。僕が真面目に物を言っていると察してくれたらしい。

「最近、高校の頃と同級生と会ってさ、また他の友達も集めて遊ぼうって誘われてるんだ。皆の休みが合うのかどうかも分からないのに、会えたからこれからも会えるだろう、って言ってる。でも、こっちもそんな気がしてるんだよ、不思議なことに。だから、もしかしたら僕には大勢でガヤガヤしてるのが合ってるのかもしれない、って思ってるんだ」

「へえ、いいなあ。私にはそういうところないって、ここ最近で気付いちちゃったから」

悠は他の席の方を向いて言った。店には学生をつるむ姿や、カップルが話しこんでいる姿がいくつも見受けられる。もし悠が、僕や中原の作る輪の中にいるのならばもっと過ごしやすくなるだろうな、とは思っていたけれど、都合が良すぎる気もした。

コーヒーを飲み終えると、話すこともなくなってきた。そろそろ、悠の用事も尊重しなければいけない。

「電話番号、変えてないよね」僕はそう訊ねた。

「うん、メールアドレスは変えちゃったけれど、こればかりは簡単には、ね」

「また何かあったら、相談役にでも使ってよ」

なるたけ軽い口調を心掛けたのだけど、悠は少し間を置いた。

「気が引けるな、なんていうか……」

「なら、気兼ねなく電話できるようになったら、かな」

すぐに答えられたおかげか、そのほうがいいかもね、と言って、悠は立ちあがった。おごってくれてありがとう、と言ってから、また少し間を置いた。車内から僕を見つけた時のように、僕を見つめている。

「じゃあ、またね」

右手を振ると、ドルマンニットの袖が少しずれて、肩が覗いた。その先にはコーヒーショップの窓があつて、傾きはじめてた西日が強く射していた。

「うん、それじゃあ」

〈了〉